

本を選ぶ

NO.413 2019年(令和1年)10月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>鳥獣戯画
- 縁というのは、繋がるときはトコトン繋がる
- 『翻訳者による海外文学ブックガイド BOOK MARK』
- 彩り・・・自閉症・・・
- 映画『ニューヨーク公共図書館』を観て図書館を応援しよう

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

鳥獣戯画

染色家・^{ゆのきさみろう}柚木沙弥郎(1922-)が、『鳥獣戯画』に挑戦——。

柚木は戦後、「民藝」との出会いを機に、後に人間国宝となる染色家・芹沢銈介に師事し、創作活動を始める。以後70年余り、型染の第一人者として活躍することどまらず、絵本や版画、立体作品など、精力的に創作を続けている。

力強く生命力に溢れた、見ているとうれしくなるような明るい色や図柄の大きな型染布。

私は柚木作品が大好きだ。いつでも手に取って眺められるようにと、部屋には『柚木沙弥郎 92年分の色とかたち』(グラフィック社/2014年)を飾っている。絵葉書やタペストリー、クッションと、気づけば柚木作品でいっぱいだ。

だから今回、柚木沙弥郎が新作として古典絵巻『鳥獣戯画』を描く、と知ったときからの待ち遠しさだったらなかった。一体どんな作品になるのだろう。やはり絵巻物なのか、それともカラフルな水彩画なのか……。

展覧会では、私はなるべく予備知識なしに、頭を空っぽにした状態で作品を楽しみたいと思っている。フラットな状態で、自分がその瞬間どう感じるのか、そのワクワク感をとっておきたいのだ。

しかし最近、情報が思いがけず飛び込んでくることが多い。どんな作品か全部わかってしまっただけから実物を見ることにもなりかねないため、注意が必要なのである。

期待に胸を膨らませつつ、海辺の素敵な美術館「神奈川県立近代美術館 葉山」へと出かけ、ついに作品との対面を果たした。

それは壁一面の12mにもなる大きな紙一枚のなかに、兎や狐、蛙たちが生き生きと描かれた白描画であった。動物たちが相撲をとったり、踊ったり。躍動的で力強い描線は、楽しいようでいて、どこか少し、退廃的な暗さも感じさせる。明と暗、生と死——圧倒的なエネルギーを放出していた。

展覧会で購入した『柚木沙弥郎の鳥獣戯画』(彗星館/2019年)によると柚木は、児童劇作家の故・村上亜土が1950年代に舞踊劇化した『鳥獣戯画』の脚本に触発され、この作品を描いたという。

京都の高山寺に伝わる絵巻物『鳥獣戯画』の第一巻を準拠に平安末期の世相を読み解き、勢力争いを風刺した村上の舞踊劇『鳥獣戯画』。当時の公演には、振付・六世藤間勘十郎、音楽・團伊玖磨、美術・村上知義ら錚々たる面々が制作に関わっていたことを今回初めて知った。叶わぬことだが、このときの舞踊劇も観てみたかったものだ。

本のなかで柚木は、『鳥獣戯画』に挑戦することが、自分の社会認識や造形思考の転機になるかもしれないと考えたと語っており、今なお新たな表現を探求し続けるアーティストの情熱に、改めて畏敬の念を抱いた。(ささきえり)

縁というのは、繋がるときはトコトン繋がる

内山 香織

遠くで出会った同郷・富山県民

縁がある人とは、とことん縁があるものである。ゆかりちゃんと最初に出会ったのは青森県弘前市、大学の天文同好会メンバーがたむろしているサークル部屋だった。彼女は元気よく「富山県から来ました!」とはじめましてのご挨拶。聞いてみると、わが実家から車で10分ほどの場所である。富山と青森、こんな遠く離れた場所でごく近所の同郷人と出会えるなんて、これって運命かも!? 久々に聞く富山弁に、テンションは最高潮、大変盛り上がったのが懐かしく思い出される。

卒業後、しばらく疎遠になったものの、私が黒部市立図書館へ異動したことで、再びリアルな縁がつながった。黒部市立図書館は富山県東部に位置するクラシックな造りの図書館だ。クラシックといえば響きはよいが、ずいぶんと年季の入った建物に開架6万5千冊がぎっしり配架されている。一冊でも多くの本を皆さんの手に届けたいと、県下で一二を争うくらい多くの企画展を行っているのが自慢の図書館だ。そんな図書館に彼女は小さな息子を連れて毎週のようにきて、抱えきれないほどの本を返却し、抱えきれないほどの本を借りて帰っていった。元気な女子大生から、すっかり母さんになったゆかりちゃんが眩しく美しかった。

彼女のSNSには時折、自分で撮影した写真がアップされるようになった。最初は息子の写真が主であったが、だんだん風景写真の割合が増えていった。ゆかりちゃんの写真の腕はメキメキ上達し、彼女の作品を友人限定にしていくのはもったいない! たくさんの人たちに見せて感激を共有したいと思うようになるまで、そう時間はかからなかった。

その思いが抑えきれなくなり、「ねえ、図書館でさ、ゆかりちゃんの写真展やってみない?」と声をかけたのはいつだったか。写真素人が図書館で作品展だなんて・・・と普通なら及び腰になりそうところだが、「え! 私でいいんですか! やってみたい!」と即答してくれたゆかりちゃんは

度胸も勇気も兼ね備えたすごい人だ。

何度か打ち合わせを重ね、彼女の風景写真に偉人の名言を乗せるという組み合わせで展示することになり、企画展タイトルを「思春期の君に伝えたいコトバたち」と決めた。普段は保健室の先生として働くゆかりちゃんだからこそできる作品展である。

きっかけは図書館で見つけた一冊の本

「なんでこんな風に写真撮るようになったの?」と聞くと、図書館で借りた中井精也さんの『撮り鉄』に収められていた一枚の写真がきっかけだったと。桜吹雪が降り注ぐ中、ホームに入ってくる列車の写真を見て、私もこんな写真を撮りたいと心が熱くなったという。『撮り鉄』はゆかりちゃん作品展の2年前に開催した「北陸本線全線開通100周年展」のために私が発注した本だった。縁がある人とはどんなところでもトコトンつながるものである。

独学で一眼レフカメラを使って写真を撮っていたゆかりちゃんにとって、あの『撮り鉄』は初めて出会う一眼レフカメラのHow to本で、写真の撮り方はすべて中井さんのこの本で学んだとか。ただの電車の写真で終わらせぬ中井写真の高い芸術性に心打たれ、あの素敵写真を撮るためのテクニックを惜しげもなく情報公開してくれた中井さんのファンになったという。

ゆかりちゃんの写真+偉人の名言=∞

企画展には32作品を出していただいたが、その中から桜を題材にした一作をご紹介します。咲き誇る八重桜と組み合わせられた名言はドイツの航海士コッ



ツェプーの「友情は瞬間が咲かせる花であり、そして、時間が実らせる果実である。」である。

この作品に彼女が添えた言葉は「桜の咲く春は新しい出会いがたくさん。そんな中で芽生える友情は、まさに瞬間が咲かせる花。その花をじっくり育てていけば本物になるよ。」太陽のように明るい笑顔と口いっぱい開けて豪快に笑う声でいつも周りを元気にしてくれるゆかり先生らしいコメントで、見る方も心がポカポカしてくる。

思春期の君に伝えたいコトバたち展

作品展が始まってからは、ゆかりちゃんの作品を見ようと普段は図書館に



らっしゃらない方々が続々と図書館へ詰めかけた。二度、三度と見に来る方も多く、用意したメッセージボードには一か月の間に30件を超えるメッセージが寄せられた。もともと友達の多いゆかりちゃんの集客力に加えて新聞報道もあり、日に日に来館者が増えていった。全作品を掲載したカラー目録と名刺サイズの作品ポートレートが大人気で、刷る先からなくなり、その月のコピー代金は過去最高記録となり、その年の図書館財政を圧迫したとかしないとか。私の見立て通り、彼女の作品にはチカラがあったのだ。

中井精也さんに会いに行く

ゆかりちゃんの作品展の2か月後に北陸新幹線が開業し、それを記念して鉄道写真家・中井精也さんの写真展が私たちの地元の美術館で開催された。

トークショーもあるというので彼女を誘って一緒に見に行った。中井精也さんは物語世界からポーンと出てきたかのように、温かくてモフモフした大き

なくまさんのような雰囲気の方で、「大好きです！」と告白するとハグしてくださった。その後の私たちは癒され満たされ、とても人さまには見せられないニヤケ顔だったことだろう。彼女は『撮り鉄』で、本って人柄まで伝わるのだなと感じてはいたけれど、実際本人にお会いして、想像していた通り、サービス精神旺盛な方だったなと振り返る。

私の方では、地元での写真展開催で中井ファンが増えると見込み、ひっそりと写真集を6冊蔵書に加えておいたところ、「私、探していたんです！中井さんの写真集！」と喜んでくださる利用者に声をかけられ、しめしめと心の中でニヤついたのは図書館員なら誰しも共感していただけるところではないだろうか。

今も続ける保健室での掲示

図書館での作品展以降も写真を撮り続け、新作を自らの勤務する保健室に作品を飾っているという。

ある学級で好きな言葉を選び、みんなで日めくりカレンダーをつくったとき



に、一人の生徒がゆかりちゃんの作品に記されていた名言を選んだそう。人前にぐいぐい出てしゃべる生徒ではなかったけれど、この言葉が彼にグッと来たんだと思うと、これまで作品掲示を続けてきてよかったと嬉しそうに報告してくれた。

図書館で一冊の本に出会い、それがきっかけで大切に思える趣味と出会えるお手伝いできたこと、そして、彼女の作品で多くの人々が心動かされ、喜んでくれたことも何よりもうれしく、これからは仕事を頑張ろうと活力がわいてくるのだから、図書館員はつくづく幸せな職業である。

(うちやま かおり：黒部市立図書館)

『翻訳者による海外文学ブックガイド BOOKMARK』

山本 泰代

9月末に「BOOKMARK」の1～12号をまとめた『翻訳者による海外文学ブックガイド BOOKMARK』を刊行しました。本書では、全204冊の書籍を紹介しています。

「BOOKMARK」は、最近の翻訳小説の中で特におすすめのものを選んで紹介している大人気のフリーブックレットで、全国の書店や図書館に配布されています。編者は翻訳家の金原瑞人さんと三辺律子さん、イラストはオザワミカさんです。

私が初めて「BOOKMARK」を手にしたのは、2、3年前の夏。当時勤めていた職場の他部署の先輩にすすめられたのがきっかけでした。素敵な佇まいの冊子は、手のひらサイズの24ページ。夢中になって読んだことを、いまもよく覚えています。ただ、そのころは忙しさを理由に、長らく翻訳物から遠ざかっていた時期でもありました。

それでも「BOOKMARK」に惹かれたのは、訳者の方の圧倒的に読ませる文章に引き込まれ、「こんな本、全然知らなかった……。これも読んでみたい、あれも読んでみたい！」と思ったから、に尽きます。仕事柄、本を読む量は多いほうですが、それでもあまりにも知らない本ばかりで、「知らないで過ごすのはもったいない」と半ば焦りにも近い気持ちになりました。また、むかし文字通り寝食忘れ夢中で読んだ『トラベリング・パンツ』（アン・ブラッシュェアーズ著、大鷲双恵訳、理論社）が紹介されているのを目にし、改めて、あのワクワク感をもう一度味わいたいと思ったからでもあります。

「こんな素敵な冊子が、冊子で終わってしまうのはもったいない。書籍化の予定はないのか？」と思ったのは、冊子を手にしたその日。翌日には人を介し、金原先生、三辺さん、オザワさんにつないでいただきました。

お会いして話が弾み、一気に書籍化へ……となればよかったのですが、当時勤めていた職場では難しく、断念。「書籍にしたい」という思いをずっと抱いて1、2年が過ぎた頃、転職をすることに。どうにもあきらめきれなかった私は、改めて先生方に打診したところ、前向きなお返事を頂戴することができ、胸をなでおろしました。そして、新しい職場で再度手を挙げ、無事書籍化へと進むことになりました。

「BOOKMARK」は配布されるとあつというまに書店から姿を消してしまうため、かなり入手困難です。ましてや、毎号揃えるとなると……。そのため、数号分が書籍化されれば「BOOKMARK」ファンの方には喜んでいただけるのでは。そして「BOOKMARK」をまだご存じない方も、訳者という絶妙な立場の方が書かれた文章にふれることで、海外作品の面白

さを知っていただけるのでは、という思いで書籍化を進めてきました。

今回は、1～12号に掲載された文章を元に、若干加筆修正をした形で1冊にしています。冊子のときとの微妙な違いを感じていただければ、うれしいです。また巻末には金原先生、三辺さん、オザワさんの鼎談も。「BOOKMARK」に対する思いを改めてお話いただきました。どこから読んででも楽しんでいただけるかと思います。

三辺さんが「はじめに」で書いてくださいましたが、「海外文学は、世界のことを知らせてくれるし、違う価値観があることを教えてくれるし、日本文学とは別の楽しみやおどろきも与えてくれるし——でも、なによりも単におもしろいから」という思いがこの本を通して伝えられたら。そして、一人でも多くの方が海外作品を手取るきっかけになれば、こんなにうれしいことはありません。

(やまもと やすよ：CCCメディアハウス)



『翻訳者による海外文学ブックガイド BOOKMARK』金原瑞人・三辺律子編／四六判並製／264頁／定価：本体1,500円＋税／CCCメディアハウス／2019年9月刊

映画「いろとりどりの親子」から、今回は自閉症について触れていきたい。

ジャックが言葉と話さないことを案じた両親は、医師から自閉症であると診断を受けた。ジャックは音楽療法、理学療法、アレルギー検査、自然療法、高圧酸素療法など、ありとあらゆる療法を試すが効果は無く、やがてストレスが原因でパニックを起こす。その後、タイピングを覚え自分の気持ちを他者に伝える手段を得た。タイピングに打ち出された言葉には、自分は話すことはできなくても、みんなが話している内容を理解することはできているという事実だった。言葉が話せないことと、物事を理解できないという事は必ずしも合致してはいない。自分の気持ちを伝えることができるようになったジャックは、タイピングを使って、独自のユーモアで家族を笑わせることもできるようになった。

では、自閉症の特性とはどのようなものなのだろうか。次に挙げる作品では、自閉症の特性について分かりやすく教えてくれる。

『たっちゃんぼくがきらいなの』（さとうとしなお作／みやもとただお絵／岩崎書店／1996）は、自閉症のたっちゃんがとる不思議な行動についてその理由を提示してくれる。例えば、たっちゃんは脳の深いところにあるアンテナが何かの拍子でギクシャクしてしまっているから、周りの人の気持ちが伝わらず、自分の気持ちを伝えることもできないということ。そして、困った時、泣きたくなった時、たっちゃんは誰にも甘えられないということ。だからたっちゃんの心はいつも不安でいっぱいなのだという。このことは気持ちを伝える手段が分からなかったジャックと重なる。

自閉症の特性を描きながら、お話として読むことができる『ベンとふしぎな青いびん』は、ファンタジーの要素もある作品だ。アスペルガー症候群の小学生のベンは、担任の先生に叱られ罰として校庭のゴミ拾いをするようになった。その時ベンは、土の中から青い瓶を見つけ、そのことがきっかけで不思議なことが起こっていく。自閉症の特性である、人との

会話の途中で別の話を始めてしまったり、知らない人や環境の変化を恐れる描写があり、ベンのことを知る要素として描かれている。もう1作、『レイン』（さとうとしなおアン・M・マーティン作／西本かおる訳／小峰書店／2016）は、ローズという女の子が主人公。ローズには好きなものが3つある。言葉（特に同音異義語）、ルール、数字（特に素数）。これらは、ローズがパニックになる原因となることもあるが、逆に落ち着くための要素でもある。ローズは、パパと犬のレインと暮らしている。レインはパパが拾ってきた犬でローズにとっては大切な相棒。そのレインがハリケーンが去った朝、家を出たまま行方不明になってしまう。人の気持ちや自分の気持ちに疎いローズだが、レインを探す過程で様々な感情に触れていく。

自閉症と生きるとはどういうことなのか。『テンブル・グランディン 自閉症と生きる』（サイ・モンゴメリー著／杉本詠美訳／汐文社／2015）を通して見ていきたい。この作品は自閉症であるグランディンが書いた自伝だ。グランディンは2010年、アメリカのニュース雑誌「タイム」で家畜の肉道的扱いを提唱する人物として「世界で最も影響力を持つ百人」のひとりに選ばれた。彼女は、動物の感覚を汲み取るように接することができる。自閉症だからこそその感性であり、そのことは生きる上で自分の一部であると話している。

自閉症と診断を受けたことでほっとしたという人もいる。そこには他の人との違いに苦しんだことの1つの理由がなんであったかが特定されたようなところからくる安心感なのかもしれない。特性を知る事で関わりの中で配慮することができる。しかしそれはあくまでも特性であり、自閉症＝その人ではない。東田直樹さんは『自閉というぼくの世界』（なおき作／れいこ絵／エスコアール／2004）の中で、今も僕は困っているけれど、それは自分を閉じ込めるものではなく、いつの日かみんなの世界と僕の世界がひとつになれる練習だと言っている。一人ひとりの世界が繋がることで、また新たな豊かさがプラスされていくのだと感じさせられた。（かんべ みやこ）

映画『ニューヨーク公共図書館』を観て 図書館を応援しよう・・・ というキャンペーンをやってみた

小笠原 清春

今年7月、この「本を選ぶ」で映画『ニューヨーク公共図書館』の鑑賞記を書かせて頂いたのだが（no. 410）、今回はその続きというか後日譚。

東京の岩波ホールで上映が開始された5月時点では、この映画が観られるのは東京と大阪の2館だけしかなかった。それが2カ月経つ間に、上映館が全国で50館を超えることに。

何と、映画後進県で名を馳せている埼玉県で2館も上映するじゃないか・・・、というのが今回の発端。ちょうど、前回の原稿の付記を書いていた頃であった。

7月の中旬過ぎ、埼玉県内の図書館人の後輩達と一夜の懇親会。図書館と映画の話で盛り上がる中、メンバーの1人が、川越スカラ座という映画館の支配人と飲み友達だという話が出るも、その時は別の話に流れてしまう。

後日、川越スカラ座で9月に『ニューヨーク公共図書館』を上映するんだから、これってまたないチャンスじゃないかと思い、貴重な伝手を使って何かやれないかと提案。さらにその提案が他の図書館人たちにも伝わり、「やりましょう」ということに。

川越スカラ座さんには、上映期間中に館内で「図書館応援キャンペーン」をやりたいということを伝え、早い段階で理解を頂くことはできていたのだが、具体的に何をどうやるのかは、こちら側にもまだ見えていなかった。

そこで、週1で作戦会議を開き、メールでやり取りを行うなどし、① 掲示板の設置、② Web 掲示板とホームページの開設、③ 「図書館と県民のつどい埼玉2019」のPRをやることにした。

私たちの素朴な疑問は「この映画は、誰がどんなことを求めて観に来ているのか」ということだった。

監督のワイズマンのファンは観るだろう、図書館員も多く観に来るだろう。でも、それよりも多

くの、図書館利用者、図書館が好きだったり関心がある人たちが観に来て、そのことを誰かに話して広がったから大ヒットになったのではないのか。

それなら、映画の感想を、図書館への想いを書き残して、他の誰かに伝えてもらおう、ということで①の映画館ロビーに掲示板を設置するアイデアが。

さらに、一言じゃ書き足りないという方のために②のWeb 掲示板を設け、図書館を応援するための

ホームページも開設することに（充実までは程遠いが、ガンバります。皆様、掲示板への書き込みをよろしく）<https://mi6eg.crayonsite.info/>。（文末にQRコードも）

また③は、毎年暮れに、埼玉県図書館協会が開催する「図書館と県民のつどい」の協賛企業にスカラ座さんにも名前を連ねて頂くことになり、お互いのPRがスムーズに行えることになった。事務局のアイデアに感謝したい。

今回のキャンペーンは、「図書館を友とする市民の会」の名前のもと、あくまでも個人の集まりによる勝手連的活動として行ったため、PRには苦労したが、様々なつなかりに助けられた。

PR チラシは、図書館員の研修会場などで手分けして配布したり、市民団体をお願いして会員に配って頂いた。映画のチラシも、「図書館応援キャンペーン開催」との文字の入ったものをスカラ座さんから頂き、県内の図書館に配布することができた（「県民のつどい」協賛企業の効果大）。

さらに、SNSでの発信力を持つ人たちによる情報のシェアなどの支援も心強かった。

そうこうする内に、上映開始の9月14日が迫ってきた。前日に、映画館ロビーに掲示板や「県民のつどい」PR パネルなどを配し、付箋紙を書いたための机を急遽お借りして準備完了。（写真・上2枚）





近くの川越市立図書館では、上映期間に合わせて“「見る」図書館「知る」図書館”と題したミニ展示が始まり、映画チラシも配布した。(写真・下)

さて、上映初日の14日、10時30分から開演なのだが、10時には既に10名が行列。入りは半分程度だったが、終了後はあっという間に帰る方が多く、掲示板に貼られた付箋紙は数枚。大丈夫かな、埋まる日は来るのかなと心配していたが、それでも少しずつポチポチと増えていく。(写真・上右)

上映期間中は毎日、誰かしらが当番で様子を見に行っていたのだが、誰が言い出したか掲示板の付箋紙(本の模様のこだわりの逸品)を整理する作業を「書架整理」、いっぱいになった掲示板からノートに移し替える作業を「書庫入れ」と呼ぶようになった。

2週間の上映が終わり、メッセージを書いて頂いた方は44人、Web掲示板の書き込みは11人。決して多くはないけれど、それぞれが熱いメッセー

ジを残されている。

企画をした者としては、これで終わらせるつもりはないのだが、正直、これからどう展開して行こうか思い悩んでいる。感想文を集めることが目的でなく、そこに詰まった図書館

に対する色々な想いを具現化するために、楽しみながら何かできないものか。幸い、というか新たなるプレッシャーになるか、今年の「図書館と県民のつどい」で、今回のキャンペーンに関する展示をとのオファーが舞い込んできた。なので、次に続く、ということでお楽しみに。

(おがさわら きよはる)

